Name：石井竜馬教授

①研究業績

査読論文“Eighty-Year Rhythms in Historical Development: A Transcontinental Analysis of Japan, Europe, and America from Medieval Feudalism to Modern Capitalism.”政治経済史学会 https://seikeishi.jp/2025/09/668.html (2025年9月29日)『政治経済史学』669号

②研究会報告

Name：井上英俊教授

①研究業績

「問題項目特性に基づくリスニング・写真描写問題の難易度推定」. 科学研究費助成事業研究成果報告書. 【報告書】

②研究会報告

Name：西原哲雄教授

① 研究業績

松坂ヒロシ・西原哲雄『ブックレット英語音声学・音韻論』(2026/2) 開拓社.

② 研究会報告

西原哲雄(2025)「弁別素性の役割と重要性について：再考」第４１回甲南英文学会
(2025/9/18:甲南大学)

西原哲雄(2026)「形態構造に関わる複合要素―素性原則の観点から―」
追手門学院大学国際学部 国際文化学会2025年度第２回発表会：追手門学院大学

Name:平井華代 教授

① 研究業績

科研費課題(23K02242)「子どもの貧困課題に取り組む民間非営利団体の国際比較」に基づき、「食支援」を入口にした、日本とフィリピンにおける子ども・家族支援の社会的包摂の取り組みを検討する研究を進め、その意義を国内外に発信した。2025年9月、アテネオ・デ・マニラ大学の共同研究者とともに、フィリピンにおいて現地調査を実施し、都市部・農村部における地域主体の子どもの食支援の実態と課題を調査した。また、元ストリートチルドレン女性のライフストーリーをもとに、支援後の人生や尊厳の回復という視点から、支援のあり

方を問い直す研究にも取り組み、その成果を公表した。さらに、女性大学教員のワークライフバランスに関する国際比較研究について、国内研究者との打ち合わせを継続し、年度内にフィリピンの研究者へのインタビュー調査実施に向けて準備を進めている。

② 学会発表

″How Does Life Unfold after NGO Assistance? Life Story of a Former Street-Connected Woman in the Philippines″, 国際開発学会 第36回全国大会, 2025年11月29日

査読付出版

″Beyond Food Assistance: Children’s Cafeteria Initiatives and the Dynamics of Community Empowerment in Japan″, Conference Proceeding of Twenty-first International Conference on Environmental, Cultural, Economic & Social Sustainability, Miami, USA, 2025年4月

③ 招待原稿

図書紹介「真崎克彦・藍澤淑雄編著『ポスト資本主義時代の地域主義―草の根の価値創造の実践―』」,『国際教育』日本国際教育学会 第31号（94-96頁）2025年9月

Name：蛭田勲教授

① 研究業績

・文部科学省検定教科書　英語コミュニケーションⅠ「Bloom」(開隆堂出版)

・文部科学省検定教科書　英語コミュニケーションⅠ「Stellar」(開隆堂出版)

それぞれ令和８年２月出版予定

② 研究会報告

茨木市教育研究会での講演

令和８年１月 15 日茨木市立西中学校で行われた茨木市立教育研究会にて「今求められる授業づくり」というテーマで講演を行なった。

講演の前に西中学校の英語科教諭が提案授業を行い、講演ではその授業についての指導助言を行うとともに、授業をデザインする際のポイントについて解説した。

今回の中学校外国語の学習指導要領の科目の目標に「言語活動を行う際には外国語によるコミュニケーションの見方・考え方を働かせる」とある。このコミュニケーションの見方・考え方は、授業をプランニングする際のベースになる重要な視点である。講演では見方・考え方の定義を踏まえ具体的な事例を交えつつ実践的な授業づくりの解説をした。

Name：藤川武海教授

研究業績

Yee et al. (2025) Entrepreneurial intentions and motivations of student-founded startups in Malaysia, Indonesia and Philippines, presented at research seminar organised by the Australia and Asian Studies.

Name：増崎恒教授

①研究業績

今年度は当初の研究計画に基づき、19 世紀末の米国自然主義文学作家スティーヴン・クレイン（Stephen Crane, 1871-1900）を、米国の帝国主義と関連づけて考察した。クレインが従軍記者として作家人生の晩年にキューバへ赴き、米西戦争を実際の戦場で取材した姿勢の背後に、当時の＜帝国主義的精神＞がいかに作用していたのかを、クレインの複数の作品を横断的に分析して明らかにすることを試みた。

その成果は、日本アメリカ文学会第 64 回全国大会（9 月 27 日、松山大学）において、単独研究発表として報告した。発表では、クレイン（およびその作品）がその内側に位置する 19 世紀末米国における「帝国主義」の具体的様相を掘り下げ、「米西戦争とセオドア・ローズヴェルト」「サファリとヘミングウェイ」「ニューヨークとクレイン」という 3 つのトピックが相互に交錯しつつ連続していく構造を、一定程度まで示すことができた。

次年度は、本研究発表の内容をさらに深化させ、必要に応じて歴史資料・文学資料を補ない、研究論文として完成させ、学会誌等への投稿を目指す予定である。また並行して、クレインにとどまらず、同時代の他の自然主義文学作家についてもクレインとの関係性を軸に再読することで、19 世紀末における＜アメリカ＞の実像をより広い射程から検討していくことにしている。

②研究会報告

該当なし

Name：松宮新吾教授

①研究業績

（1）国際学部紀要投稿論文（2026 年 3 月掲載予定）

児童生徒の学力に影響を及ぼす学習因子に関する一考察

–大阪府 A 市の令和 7 年度「全国学力・学習状況調査」のデータ分析に基づく授業改善の提言–

Factors Affecting Academic Achievement in Elementary and Junior High Schools: Evidence and Instructional Implications from the 2025 National Assessment in City A, Osaka Prefecture

（2）　門真市教育委員会報告書（2026 年 1 月提出）

門真市の令和７年度「全国学力・学習状況調査」のデータ分析に基づく授業改善の提言
Policy Implications for Instructional Improvement Based on an Analysis of the 2025 National Assessment of Academic Achievement and Learning Conditions: A Case Study of Kadoma City, Osaka
(3)　門真市教育委員会報告書（2026年1月提出）
門真市の令和７年度「大阪府中学生チャレンジテスト」のデータ分析に基づく授業改善の提言
Improving Classroom Instruction Through the Analysis of the 2025 Osaka Prefectural Junior High School Challenge Test: Insights from Kadoma City
(4) 追手門学院大学共通教育機構論集第４号（2026年３月掲載予定）
2025年度「OIDAI英語力診断テスト」と英語学習実施状況調査の分析に基づく共通教育機構科目「総合英語」と「Online English Seminar」のカリキュラム評価及び授業効果の検証に関する考察（その2）
Evaluating the 2025 English Curriculum and Instructional Effectiveness of Integrated English and Online English Seminar Classes: A Statistical Analysis of the OIDAI English Diagnostic Test and English Learning Survey (Research II)
②研究会報告
『小学校の先生のための英語指導スキルアップ講座』Back to Basics: Not to Teach English, but to Teach People English（追手門学院小学校国際教育センター）
第１回研修：原点回帰：「英語を教える」から「ヒトに英語を教える」へ　Back to Basics: Not to Teach English, but to Teach People English
第２回研修:認知学習理論(CCL)に基づく識字学習　Literacy Learning Based on Cognitive Learning Theory (CCL)
第３回研修：「コミュニカティブ・アプローチに基づく小・中学校英語と探究的な学習の連動」
Integrating Graduation, Moving Up, Inquiry-Based Learning, and English Activities
英語学習と卒業・進級・探究活動の統合

Name: Eric Ross Miller 教授

① 研究業績

Miller, R. E. (2026). Beyond access: Computer self-efficacy and learner agency in online EFL education. Otemon Gakuin University Faculty of International Studies Review, 4.

②研究会報告

Developing Digital Literacies: AI as Content in the EFL Classroom, AsiaTEFL, Hong Kong, July 2025.

Teaching AI as Content: Fostering Critical Engagement & Digital Literacy, 国際学部２０２５年第一回研究会、Ibaraki, July 2025.

Artificial Intelligence as Content: STEAM-Informed Language Learning for Non-STEM Students, JALT Okinawa / PIE SIG STEAM (Science, Technology, Engineering, ARTS, Mathematics) Conference, Okinawa, February 2026.

Name: 今村祥子准教授

① 研究業績

インドネシア・ジャカルタにて現地調査（2026 年 2 月 17 日～3 月 1 日）

１） 主要政党の選挙戦略に関するインタビュー調査と資料収集（科研費）

２） インドネシア民主主義における権威主義的要素に関し、人権擁護団体関係者へのインタビュー調査と資料収集（個人研究費）

② 研究会報告

なし

Name: 北村健二:准教授

【共訳書】

サンデル・ファン・デル・レーウ（著）、嶋田奈穂子、王智弘、北村健二、熊澤輝一、三木弘史（訳）、2025 年、『複雑系としての社会史―社会・技術・環境の共進化と未来』、京都大学学術出版会.

【研究会発表】

北村健二、2025 年、「自然環境保全と地域発展の両立を目指す多様な主体間の協働」、追手門学院大学国際文化学会 2025 年度第 1 回研究会、茨木.

北村健二、2025 年、「里山里海保全と地域コミュニティ―日本(能登)の事例から考える」、アジア太平洋無形文化遺産研究センター「無形文化遺産と生態系」事業ワーキンググループ第 1 回会合、堺.【招待講演】

北村健二、2025 年、「水平型 MSC 手法による参加型評価と学び合い」、東京大学大気海洋研究所大槌沿岸センター協働事業参加型評価セミナー、大槌. 【招待講演】
北村健二、2025 年、「多様な主体が協働する地域―青海地区におけるツシマヤマネコを守る会の活動からの学び―」、対馬未来フォーラム 2025（ポスター発表）、対馬.

Name:小松久恵准教授

① 研究業績

2026 年 3 月（出版予定）
「グローバリズムの闇に散る花 ― アルパナー・ミシュラ作『Asthi Phool（骨の花）』を読む ―」
『グローバル・スタディーズ叢書』第 2 巻、東信堂（出版予定）。

2026 年 3 月（出版予定）
「月に願いを：雑誌『Cand』の言説における女子教育と理想の女性像」
『南アジア研究』第 37 号、パネル報告要旨（出版予定）。

② 研究会報告

2025 年 12 月 20 日
「耐える女から戦う女へ：現代インドにおける女性表象の変遷」
筑紫女学園大学 令和 7 年度人間文化研究所特別研究会（講師）。

2025 年 9 月 28 日
「月に願いを：雑誌『Cand』にみる感情と対話」
日本南アジア学会第 38 回全国大会 パネル 7「南アジア研究における『感情』へのアプローチ：歴史・文学・ジェンダー」、東京外国語大学。

2025 年 6 月 14 日
「月に願いを：雑誌『Cand』にみる女子教育と『感情』」
感情科研 2025 年度第 1 回研究会、東京外国語大学。

Name: 原　めぐみ准教授

① 研究業績

「自律学習を促す TOEIC 授業デザインの改訂と実践研究」『国際文化研究第 4 号』、2026

② 研究会報告

Name：澁谷恵美講師

①研究業績

・「観光ガイドの視点から考える外国語教育と観光教育における可能性」
（国際学部紀要第４号において執筆中）

②研究会報告

外国語教育や日本国内外の観光分野やガイド・コミュニケーション活動に焦点をあてた発表および活動

【口頭発表】

・“A discussion of communication skills through professional sports performance”
（2025 年 4 月 27 日、 OSAKA JALT、於：大阪女学院大学）
・「サステナブルツーリズムの観点から欧州やベルギーの観光と観光ガイドを考察する」＊
（2025 年 7 月 26 日、 ベルギー研究会、於：拓殖大学 文京キャンパス）
・“Foreign language learning and tour guiding in human resources context”＊
（2025 年 11 月 1 日、 JALT2025 における Waseda University, Graduate Student Showcase、於：国立オリンピック記念青少年総合センター）
（*:若手研究者奨励費を活用）

・【予定(2026 年 3 月 5 日)】「ガストロノミーを通じた欧州向けアウトバウンド観光の促進に関する一考」
（ベルギー研究会　ブリュッセル大会､於:ブリュッセル自由大学(ULB)　Campus Solbosch）

【上記との関連・教育方法の実践例 】

・「プロジェクト３C」の授業内における見学として大阪空港ホテル、大阪国際空港のインフォメーション業務やラウンジ業務を訪問・見学実施（2025 年 7 月 8 日）
「プロジェクト 4C」の授業内に「全国通訳案内士」の資格保有者を招いて（及び自身は現在、「京都市認定通訳ガイド」の資格保有)、レクチャー及びガイド体験活動（2026 年 1 月 6 日）を実施。
・「自主研究 IK」の授業においても同様の観光ガイドをコンセプトに取り組む。

【その他 】

ガイド勉強会（ボランティアガイド協会のネットワークを通じ、2025 年以降、これまで４回（2025 年：3 月 15 日、6 月 7 日、9 月 27 日、 2026 年： 1 月 31 日）ガイド[実地含む]研修会への参加しており、本活動は研究協力へと発展 している。

Name: Jacob Reed 講師

① 研究業績

Article and PANSIG presentation: *Fostering Leadership through Peer Facilitation in an Analog Game-Based University Course* (in press, Dec. 2025)

Article and JARPS Presentation: *Campaign Board Games as a Stepping Stone towards TRPGs* (Nov. 22, 2025)

Article for Otemon Bulletin (Kiyo): *Board Games as a Medium for Learning: A Brief Overview of a Self-Directed Learning Course* (Mar. 1, 2025)

② 研究会報告

③

This year, my work continues to contribute to understanding how tabletop roleplaying games and analog board games can enhance learner engagement, leadership, and language development.

Name: Thomas Brook（トーマス・ブルック）

①研究業績

【英語論文】“Living with, and Living in Language: How Two Pioneering “Border-Crossing” Writers of Japanese Identify with Language”『国際学部紀要』第 4 号、2026 年 2 月［予定］

【日本語図書紹介】「日本語習得の道と、その向こうにあるもの：李琴峰著『日本語からの祝福、日本語への祝福』(朝日新聞出版、2025 年)」、『野草』第 115 号、中国文芸研究会、2026 年 3 月［予定］

【日本語口頭発表】「日台間の現代日本語文学から考えるトランスナショナル・ジャパンの課題」(2025/07/22、追手門学院大学オーストラリア・アジア研究所主催研究会)

【英語口頭発表】““Different and yet the Same, the Same and yet Different”: Translation as Metaphor for Colonialism in Levy Hideo’s Japanese Prose” (2025/07/30, International Comparative Literature Association 2025 Congress, held in Seoul)

【英語口頭発表】“Walking through the History of Another: Reading Yoko Tawada’s *Hyakunen no Sampo* in Relation to Nostalgia” (2025/09/19、INTERFACEing 2025 Conference, held in Istanbul, attended online)

③ 研究会報告